

Title	白詩受容考：「香爐峯雪撥簾看」について
Sub Title	On how the poetry of Po Chü-l was received inJapan : in the case of 'Hsiang-lu Fêng hsüeh p'o lien k'an'
Author	太田, 次男(Ota, Tsuguo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1974
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.33, (1974. 2) ,p.1- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00330001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

白詩受容考

——「香鑪峯雪撥簾看」について——

太田次男

白氏文集卷十六所収の詩「香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首」(0975—0979) (以下、香鑪峯下詩と略称)の第四首のうち、副題に掲げた一句は、現在では、詩そのものとしてよりは、枕草子の故事を通して周知知られている。

ただ、その故事の中心をなす「簾を高くあげる」ことが、原詩の「撥簾看」と、如何ように関連しているのか、未だ充分の考察が加えられたとは云い難い。筆者は、曾て、先輩の驢尾に付して、若干、この点に言及したことがあるが、更に、改めて、検討を必要とする。後に述べるように、「撥簾」の語は、白詩の一例を除けば、全唐詩をも含めて、管見では、中国の詩の中には見出されず、謂わば、白氏得意の造語であると思ふ得よう。

ところが、わが国に於ては、菅原道真が夙にこの語に注目し、その詩作の中に取り入れて、四度に亘り試みている。また、平安末期にも、他に例がある。それに、枕草子の故事をも合せれば、中国では殆んど顧みられなかった言葉が、わが国では意外な反響を呼んだということになる。

いま、先ず、この詩が成立した背景に触れ、次で、『菅家文章』等の邦人漢詩文集、及び『枕草子』の当該箇所について、当時の訓点や和文の用例をも参照しつつ、考察を加えることにする。

註 (1) 神田秀夫「白楽天の影響に関する比較文学の一考察」

〔国語と国文学〕昭和二三・一〇、一一月号)及び、拙

稿「平安時代に於ける白居易受容の史的考察」(上)(「史学」三二—四 昭和三五)参照。

— (1) —

先ず、この香鑪峯下の詩成立の周辺に触れて、詩そのものの理解の一助ともしたい。(引用の白氏文集の巻次、及び、本文は元和四年刊那波古活字本による。但し、金沢文庫本現存巻については、金沢本々文に従つて、本文を改めた箇所もある。訓点については、原則として、白氏文集万治刊本に拠つたが、私に改めた箇所も存する。作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』所載「綜合作品表」に、また、白詩以外の詩の作品番号は『唐代の詩篇』(京大人文科学研究所編)に拠る。)

白氏の官僚としての生活を省みると、元和二年(812)の翰林学士(三十六歳、翌年から同五年までの左拾遺の時代が、天子の側近に侍する諫諍の官として、兼済の理想を掲げて、最も積極的に政治的活動がみられた時期である。ただ、その建言や政治・社会詩には、時に痛烈な言辭も含まれていて、為政者側からの反発も強く、遂に、名教上からの批判に擦り替えられた政治圧力も加わつた為、程なく、司馬として、江州へ流謫された。

江州司馬時代は元和十年(815)秋から、同十三年末、忠州刺史に転ずるまでの四年に亘り、白氏、四十四歳から四十七歳までの間に当る。香鑪峯下の詩はその第三年に作成され、また、著名な「琵琶引」の作成は、その前年である。

江州到着直後に、その文学論ともいふべき「与三元九書」(卷二八・二九)が書かれた。元九とは、いう迄もなく、親友元稹である。その末尾に、

潯陽臘月江上風苦寒。歳暮鮮歡。夜長無睡。引筆鋪紙。悄然燈前。有念則書。言無次第。勿下以繁雜。為_レ倦。とあり、その内容からみても、従来の主張がこういう形で整理されたといえる。同時に、自撰の詩文集十五巻が用意されている。とす

れば、文学史的見地に立つてみれば、この文学論と詩文集とをもって、白氏の第一期は終了したといえよう。従って、江州時代は、次の新しい時代への出発ともいえる。

白氏は、韓愈などとは稍異り、長安を離れた勤務地や、流謫の地に於ても、夫々、異ってはいるが、己が詩作の養分となるものを吸収している。短期間ではあるが、仏教の一中心地である廬山に近い江州の地であって、政治上はともかくとして、内的活動は活潑であり、その詩にみえる寺院だけでも、「東林寺」「西林寺」「大雲寺」「宝祿寺」「大林寺」等があり、何れも、白氏の精神生活に大きく影響したことを示している。

江州時代の心情を、元和十二年の「東南行一百韻」(卷一六・0908)より抄出すれば、

渭北田園廢。江一西歲一月徂。憶婦恒慘澹。懷レ旧忽踟一蹰(中略)

日一近恩雖重。雲高勢却孤。翻レ身落一霄漢。失レ脚倒一泥一塗(中略)

沈一冥消一意氣。窮一餓耗一肌膚。防レ瘴和ニ殘藥。迎レ寒補ニ旧襦(中略)

兀一兀都疑一夢。昏一昏半似一愚(中略)

壯志因レ愁滅。衰一容与病俱(下略)

などに、略々盡される。これに類似する感傷の言葉は、他の詩中に於ても屢々吐かれてゐる。「窮一愁自要一醉如一泥」(卷一六・北樓送客帰上都 0922)や「酒一狂又引一詩魔一発」(卷一七・醉吟二首ノ二 1065)の如く、酒に溺れ、それがまた、詩作にも連なっている。四年間の時の経過は、表現に若干のニュアンスの変化を齎しはするが、摧折の身を思い、流謫の愁は抑える術とてない。

また、司馬とはいえ、官僚の身としては、たとえ、

年一長身軀一慵。百一年無レ所レ欲(因沐感髮寄朗上人二首ノ一 卷一〇・0515)

とはいっても、淮西の寇が未だ平がざる報に接しては、

愚一計忽思飛一短一檄。狂一心便欲一請一長一纓。従一來妄動多如レ此(卷一六・0960)

のごとく、憤然として流滴の身をも忘れる。或いは、「題旧写真圖」(巻七・0325)に於て、

我昔三十六。写_シ貌_ヲ在_ニ丹青。我_レ今四十六。衰頽_ハ臥_ニ江城_ニ。

という現状を認めつつも、最後に、

形骸属_ニ日月。老_レ去何足_レ驚。所_レ恨凌烟閣。不_レ得_レ画_キ功名_ニ。

と、書き加えることも、決して、忘れてはいない。

自から「憂人」「煩惱多心焦」「病心情」などを認めた白氏は、それを克服すべく、前述の如く、多くの寺院に参じ、或いは、道士に問うなど、散閑の身であることは、求道のためには、寧ろ、好都合であった。

こういう、安静を求める白氏の内的活動の中で、かなりの比重を以て認めらるべきものが、自然との交渉である。

流滴という外形は同じであっても、二王の変に連坐し、十年の永きに亘り、配流の地永州に在った柳宗玄には、その憤悶の情を散じうるものは、唯、山水があるのみであり、その山水遊は、やがて、昇華されて、絶品「永州八記」となった。

柳宗元の、山水に対するその純粹さと激烈さには、前提として、先ず、自己と山水との鋭い対峙——寧ろ敵対——が認められる⁽³⁾ところが、白氏にとって、江州の自然は、辺境の地には相違ないが、己れに対峙するものではなかった。そして、四年間の江州生活の中には、既に早くから、その萌芽がみられた自然回帰の思想が、一層顕著に窺えるのである。

そこで、次項に於て、草堂についても、少しく考察しよう。

註(1) 花房英樹『白居易研究』五五頁。

(2) 「其奈長沙老未還。赤嶺猿声催白首。黄茅瘴色換朱顏。誰言南国無霜雪。尽在愁人鬢髮間。」(酬元員外三

月三十日慈恩寺相憶見寄卷一六・0666 元和十二年)

「衰相來何速。心是煩惱多。心焦血不足」(因沐感髮寄

朗上人二首ノ一 卷一〇・0515 元和十二年)

「草香沙暖水雲晴。風景令人憶帝京。還似往年春氣味。不宜今日病心情」(寒食江畔 卷一六・0665 元和十二年)

(3) 拙稿「柳宗元の山水記について」(斯道文庫論集)第三輯)

元和九年八月、白氏は藍田の悟真寺に遊び、「遊悟真寺詩」(卷六・206)、一百三十韻を作った。この時、既に翰林学士を辞し、京兆府戸曹参軍に転じており、失意の時代であった。その詩を抄出する。

我、本山人。誤為三時網一牽。牽一率使讀書。推一挽令効レ官。

既登三文字科。又忝三諫諍員。拙一直不レ合レ時。無レ益同素一浪。

以レ此自慙。慙。戚戚常寡一歛。無レ成心一力尽。未レ老形骸残。

今、来脱簪組。始覚離一憂一患。及レ為三山水遊。弥得三疎一疎頭。

野一麋斷三羈一絆。行一走無三拘攀。池一魚放入レ海。一往何一時還。

身著三居士衣。手把三南一華篇。終来三此三山一住。永謝三区一中縁。

我、今四十余。從レ此終身閑。若以三七十期。猶得三三三十年。

この中にみられる「本山人」とあるのは、江州流謫の後、元和十二年、香鑪峯下に草堂を構えた時の作にも、

言我本野夫。誤為三世網一牽。時、来昔捧レ日。老、去今帰レ山。

倦、鳥得三茂樹。涸魚反三清源。卷七、香鑪峯下新置三草堂。即レ事詠レ懷題於石上(203)

の如く、全く同趣旨が述べられ、これらを、既に早く永貞元年(805)に詠せられた、

日出塵埃飛。群動互營一營。營一營各何求。無レ非利与レ名。

而我常晏一起。虚住長一安一城。春、深官又満。日有三帰一山情。(卷五・早送三举人入レ試(280))

にみえる「帰山情」とも併せ考えれば、白氏の、自然に対する一貫した心情が認められる。

このように見えてきて、始めて、同じく、香鑪峯下の山居の記である「草堂記」(巻二六・1472)の、

山北峯曰「香鑪峯」。北寺曰「遺愛寺」。介峯寺間。其境勝絶又甲盧山。元和十一年秋。太原人白楽天見而愛之。若遠行客過故郷、恋恋不能去。

にみられる、特に「太原人」を冠称した意味も、一層切実に感ぜられる。

江州の地に於て、この草堂が求め得られる以前にも、

朝詠三遊仙詩。暮歌采薇曲。臥雲坐白石。山中十五宿。

行隨三出洞水。廻別綠巖竹。早晚重来遊。心期瑤草綠。(巻七・出山吟 0293)

の如く、屢々出遊し、「二年踰遍匡廬間」(巻二二・朱藤謠 1430)という程であった。

しかし、より自然に近づいて、白氏がいう、山水を喜ぶ「病癖」を満足させ、「身自由」が得られ、求道にも適する場所を求めるとすれば、更に一步進んで、

已任三時命去。亦從三歲一月除。中心一調伏。外累尽空虚。

名宦意已矣。林泉計何如。擬近三東林寺。溪辺結一廬。(巻七・歳暮 0294)

と、山居を求める方向へ動いてゆくのが自然の成行であろう。元和十二年、「与微之書」(巻二八・1489)の中で、白氏は新たに得た草堂について、

僕去年秋始遊廬山。到東西二林間。香鑪峯下。見雲木泉石。勝絶第一。愛不能捨。因置草堂。

と説明している。「五架三間」「二室四牖」の規模をもち、素木、粗壁の山居がこれである。この時、恐らく白氏は白衣を纏うこともあったであろう。

白氏にとり、山居に住するということは、

欲下居其中。参禅養素。(巻二三・祭匡山一文 1451)

不唯耽^リ翫^テ水石^ニ。以^テ樂^ニ野^ノ性^ト。亦^レ欲^ク擺^テ去^ル煩悩^ヲ。漸^ク歸^リ空門^ニ。(同・祭^ニ廬山^ノ文^ニ 1452)

の如く、切実な内的要求に出るものであった。やがて、

外^ニ適^シ内^ニ和^ス。一^ニ宿^シ体^ノ寧^ヲ。再^ニ宿^シ心^ノ恬^ヲ。三^ニ宿^シ後^ニ頽^シ然^ト嗒^シ然^ト。不^レ知^ル其^ノ然^ル而^レ然^ル。(草堂記)

としい、また、

每^レ一^ニ獨^シ住^ス。動^シ彌^ク旬^ノ月^ヲ。平^シ生^ノ所^ニ好^シ者^ト。尺^ニ在^リ其^ノ中^ニ。不^レ唯^ニ忘^ル婦^ト。可^シ以^テ終^ル老^ヲ。(卷二八・与^ニ微^ノ之^ノ書^ニ)

と述べ、山居に満足^{の意}を表明している。

元和十二年七月に、中央に於ては、親しい崔群が相となり、これにより、白氏の前途は好転する。中央の知友への、再度の、書簡の内容からすれば、何れは転出することを或る程度予期し、寧ろ、期待すらしていたと思われる。その忠州刺史転出は、翌年末に実現した。然しながら、

司^ノ馬^ノ歲^ノ秩^ヲ滿^テ。出^テ処^{行^ノ止^ノ}。得^ハ以^テ自^ラ遂^ス。則^チ必^ズ左^{手^ノ引^ニ妻^ノ子^ト}。右^{手^ノ抱^ニ琴^ノ書^ト}。終^ル老^ヲ於^テ斯^ニ。以^テ成^ル就^ル我^ノ平^{生^ノ之^ノ志^ト}。(草堂記)

という当時の覚悟も、単なる空言と見做すべきではない。白氏の求めたものは、人為の浮動を越えた自然であり、そこには拘束のない自由が存する。それは同時に、禅などの仏教思想とも重なって永遠性を保持する。香鑪峯下の草堂は、ここに住する者に、こういう自然を味わしめるに足りる場所であった。⁽⁷⁾

江州の四年間は、白氏に内省の機を与え、以後の詩にも影響する所は少くはない。ただ、その詩が、無論、草堂にて作られた詩をも含めて、特に深刻になったり、難解になったわけではない。その基調は、依然として、平明であり、その思想も常識的であるので、殆んど何の抵抗も無く、わが国に受け容れられている。しかも、わが国には、古くから、流滴者に対する同情は強く、また、その詩は、すべて、官僚としての生き方の根本に触れるので、わが文人達にも切実な問題を含んでいた。

註(1)「予自思。從^テ幼^シ道^シ老^シ。若^シ白^ノ屋^ノ若^シ朱^ノ門^ノ。凡^レ所^ニ止^ス。雖^シ水^ニ為^レ池^ト。其^ノ喜^ニ山^ノ水^ニ病^ノ癖^{如^シレ}此^ト」(草堂記)

一日二日。輒^レ覆^テ簣^ヲ土^ヲ為^レ台^ト。聚^テ筆^ヲ石^ヲ為^レ山^ト。環^テ斗^ヲ。身^ノ心^一無^レ繫^ス。浩^シ浩^シ如^シ虚^ノ舟^ト。富^貴亦^レ有^レ苦^シ。苦^シ在^ニ心

危_レ憂。貧_レ賤亦_レ有_レ寒。寒_ニ在_ニ身自由_一」(巻七・詠意(2)38)

(3) 「三_一間兩_一柱。二_一室四_一牖。広_レ表_レ豊_レ殺。一_レ称_ニ心_一力。」

(巻二六・草堂記)とあり、また、「五_一架三_一間」(巻十六・香鑪峯下新_一卜山居草堂 0975)ともいふ。

(4) 草堂内の素屏についていふ。「吾_レ不_レ令_ニ加_ニ一_一点_一一_一画_一於_ニ其上_一者。欲_ニ爾_レ保_レ真_レ而_レ全_レ白」(巻二二・素屏語 1429)この「保_レ真」は、当然、素木、粗壁等にも適用されて然るべきであらう。

(5) 「仍_レ開_ニ一_一草_一堂。平_ニ治_レ行_レ道_レ路。安_ニ置_レ坐_レ禪_レ牀。手_一板_一支_レ為_レ枕。頭_一巾_一閑_レ在_レ牆。先_一生_一烏_一几_一鳥。居_一士_一白_一衣_一裳。竟_レ歳_レ何_レ会_レ悶。終_レ身_レ不_レ擬_レ忙。滅_ニ除_レ残_レ夢_一想。換_ニ一_一尺_一旧_一心_一腸_一」(巻一八・郡_一齊_一暇_一日_一憶_一廬_一山_一草_一堂 1111)

(6) 詩についてみても「江西_一裴_一常_一侍_一以_一優_一礼_一見_一待_一(下略)」(巻

二 (1)

ここで、本題の詩に入る。香鑪峯下の詩五首のうち、先ず、主題の第四首全体を引く。(本文・訓点は共に管見抄本に拠る)

日_ハ高_ク睡_ミ足_ヲ猶_モ慵_シ起_ル。小_ニ閑_ニ重_シ。衾_ヲ不_レ怕_レ寒_ヲ。遺_レ愛_レ寺_ノ鐘_ノ欲_ク枕_ヲ聽_ク。香_ハ鑪_ノ峯_ノ雪_ヲ撥_ク簾_ヲ看_ク。

廬_ハ山_ノ便_ニ是_レ名_一地_一。司_ハ馬_ヲ仍_モ為_シ送_ル老_シ官_ニ。心_ハ泰_シ身_ヲ寧_シ是_レ婦_ノ処_一。故_ニ郷_ノ何_レ独_リ在_ニ長_一安_一。

註(1)「撥」、わが国の白氏文集古鈔本及び日中の刊本類、すべて「撥」に作る。和漢朗詠集古鈔本のうち、御物伝行成自筆本・同近衛家蔵本の二本のみ、何故か「卷」に作る。これに就ては後述する。

(2)「廬山」、わが国の古鈔本「廬山」に作り、刊本類「匡廬」に作る。

十七・1088)は「壯_一心_一直_一氣_一未_レ全_レ銷_一」で結ばれる。また、「除_一忠_一州_一寄_一謝_一崔_一相_一公_一」(同・1088)で、忠州_一転_一任_一を_一友_一人_一崔_一羣_一に_一謝_一して_一いる。

(7) 同じく流謫の身ではあっても、韓愈や柳宗元と違って、白氏は官僚としての拘束された境遇を詠じ、切実に身の自由を求める詩が際立って多い。柳宗元の永州流謫は、白氏のそれに比し、遙かに厳しい環境にあったが、詩的饒舌は、寧ろ意外という程少なく、その窮愁の情は、専ら「永州八記」という短文に凝縮された。つまり、流謫や拘束に対する反応の仕方が、独自であり、白詩では、一種の生活詩として、内心が縷縷として述べられた。この時代のものを含めて、この種の詠嘆の言葉こそ、わが平安朝文人達にとって、最も共鳴するところであった。

(3) 「何」、わが国古鈔本「何」に作り、刊本系諸本は「可」に作る。但し、明馬元調校刊本は「何」に改む。

わが国では、『千載佳句』や『和漢朗詠集』以来、この中の第三句・四句のみが、断章されて広く知られている。無論、一首の中では最も主要な句には違いないが、この句が単なる素材としてではなく、また、概念的な理解に止まらないためにも、一首が全体として、更に、出来得べくば、連作五首として鑑賞される必要がある。(1)

白氏は、同趣旨の詩を、時に応じて屢々作ることがあるが、江州時代の作で、内容上これに近いものを求めれば、

軫^{チン}枕^{シヤク}重^{チウ}安^{アン}寢^{シヤク}。廻^{クワイ}頭^{トウ}一^{イツ}欠^{ケツ}伸^{シヤン}紙^シ憲^{ケン}明^{メイ}覺^{ケツ}曉^{キョウ}。布^フ被^{ヘイ}暖^{ニヤム}知^チ春^{シュン}。

莫^{ムク}強^{キヤウ}疎^ス慵^{ユウ}性^{シヤウ}。須^ス安^{アン}老^{ラウ}大^{ダイ}身^{シヤン}。鷄^キ鳴^{メイ}一^{イツ}覺^{ケツ}睡^{スイ}。不^フ博^{ハク}早^{ソウ}朝^{チャウ}人^{ジン}。(卷十七・曉寢 1066)

や、これは長慶三年(823)、杭州刺史時代の作ではあるが、

睡^{スイ}足^{ソク}心^{シン}更^{メイ}慵^{ユウ}。日^{ニチ}高^{カウ}頭^{トウ}未^{メイ}衰^{スイ}(卷八・0362)

などは、香鑪峯下詩を、補足するに足りよう。

連作五首のうち、第二首に「喜^シ入^{ニク}山^{サン}林^{リン}初^{シュ}息^{シツ}。影^{エイ}。厭^イ趨^ク朝^{チャウ}市^シ久^ク勞^{ラウ}生^{シヤウ}」とあるのは、白氏の実感として、そのまま受取れるが、「從^リ玆^シ耳^ニ界^ケ応^{オウ}清^{シヤウ}淨^{ジヤウ}。免^{メイ}見^{ケン}尼^ニ啾^{シュ}啾^{シュ}毀^{クイ}譽^ヨ聲^{シヤウ}」(第二)や「宦^{クワン}途^ト自^ジ此^シ心^{シン}長^{チャウ}別^{ベツ}。世^セ事^シ從^リ今^{キン}不^フ言^{エン}」(第五)「故^コ鄉^{キヤウ}何^{ナニ}獨^{ドク}在^{ゾウ}長^{チャウ}安^{アン}」(第四)とはいうも、更に、結句「還^チ有^{ユウ}ニ一^{イツ}條^{テウ}遺^イ恨^{コン}事^シ。高^{カウ}家^カ門^{メン}館^{クワン}未^{メイ}酬^{ジュウ}恩^{オン}」などをみれば、長安つまり白氏のいう「朝市」が、未だ心中に占める比重は、決して軽くはない。これは、流謫のわが身を顧みつつ、否定しようとして否定し得ない長安での官僚としての活動への期待と、この草堂に於ける静閑なる生活との、この二つの生き方が、未だ、充分調和せず、内心に併存し、対立しているとみられる。

とすれば、ここには、確かに、一応安息と身の自由とは存するにしても、その閑無事には、猶、憂傷、憔悴、倦怠等を伴っていたことは否定すべくもなからう。

次に、草堂と香鑪峯との関係については、

三一間茅舎向山開（卷十七・別草堂三絶句ノ三 1097）

とあり、また、

楽天既来為主。仰觀山俯聽泉（草堂記）

微之微之。作此書。夜正在草堂中。窓下一（中略）舉頭但見三山僧一兩人。或坐或睡（卷二十八・与微之書）
などに抛れば、当然のことながら、山と草堂との距離はそれ程遠くはないし、室内から香鑪峯を仰観することが出来た。

また、「小閣重衾不_レ怕寒」の一句は、かえって、外界の寒気の迫るのを感じしめる。そして、雪の香鑪峯については、詩と同じ頃に書かれた「草堂記」に、

冬有_二鐘峯雪_一。陰晴頭晦。昏旦含吐。千變万狀。不可_二殫_一紀。觀_レ樓而言_一

と述べられている。これは、短期間の遊覧者の言ではなく、長期に亘り、折に触れてこの山を仰ぎ観ている者にして始めて発し得る言葉といえる。(2)

こうみてくると、「撥簾看」とは、ごく普通にみられる、簾を高々と巻き上げて、山を見る、ということ表現したものではなく、そこには、心理的屈折があり、鐘の声に誘発され、山を見るべく、纔かに簾を上げる程度の動作を表現したものである。先ず、外界の寒気を防ぐ必要があり、また、見慣れた雪の山は、一瞥すればそれで充分足りたであろうし、また、牀にあって、起るに備い気持に附随する動作の表現としても、例えば、

藜杖侵寒露。蓬門啓曙煙。力稀經樹歇。老困撥書眠（杜甫 11737）

等の、「撥」の用例をも考慮に入れれば、この場合、「巻」ではなく、「撥」を使用することが最も適切であると思われる。

そこで、次項に於て、白氏が用いた「撥簾」の傍証のために、白氏文集、並びに、唐詩の中の用語例について検討しよう。

註（一）参考のため、連作五首のうち、第一・二・三・五を、こ

こに掲げる。

（一）五一架三一間新草堂。石墻柱柱竹編牆。南齋納日冬天暖。北戸迎風夏月涼。灑_レ砌飛_一泉纔有_二點_一。私_レ窓斜_レ竹

不成^レ行。来^レ春更^レ茸^レ東^レ廂^レ屋。紙閣^レ簾^レ簾^レ著^レ孟^レ光。
〔喜^レ入^レ山^レ林^レ初^レ息^レ影。厭^レ趨^レ朝^レ市^レ久^レ勞^レ生。早^レ年^レ薄^レ有^レ煙^レ霞^レ志。歲^レ晚^レ深^レ諳^レ世^レ俗^レ情。已^レ許^レ虎^レ溪^レ雲^レ裏^レ臥。不^レ爭^レ鼉^レ尾^レ道^レ前^レ行。從^レ玆^レ耳^レ界^レ庇^レ清^レ淨。免^レ見^レ啾^レ啾^レ毀^レ譽^レ聲。〕

〔長^レ松^レ樹^レ下^レ小^レ谿^レ頭。斑^レ鹿^レ胎^レ布^レ白^レ布^レ裘。棗^レ園^レ茶^レ園^レ爲^レ産業。野^レ麋^レ林^レ鶴^レ是^レ交^レ遊。雲^レ生^レ澗^レ戸^レ衣^レ裳^レ潤。風^レ隱^レ山^レ厨^レ火^レ獨^レ幽。最^レ愛^レ一^レ泉^レ新^レ引^レ得。清^レ冷^レ屈^レ曲^レ澗^レ階^レ流^レ笛^レ宦^レ途^レ自^レ此^レ心^レ長^レ別。世^レ事^レ從^レ今^レ口^レ不^レ言。豈^レ止^レ形^レ骸^レ同^レ土木。兼^レ將^レ壽^レ夭^レ任^レ乾^レ坤。胸^レ中^レ壯^レ氣^レ猶^レ須^レ遣。身^レ外^レ浮^レ榮^レ何^レ足^レ論。還^レ有^レ一^レ條^レ遺^レ恨^レ事。高^レ家^レ門^レ館^レ未^レ酬^レ恩。〕

(2) 「草堂記」は草堂の屋舎完成後間もなく書かれたものであり、また、山居の期間は永くはない筈である。ところが、記述の中には、香鑪峯の四季の美が夫々挙げられている。従って、この美観は、屋内の、或いは草堂を根拠

(2)

先ず、白氏文集（詩篇に限る）に使用された、「簾」を上下、或は斜に動かすような、動作に関する用例、及び、「撥」のその他の用例について検討する。

「簾」に係わる用例について 唐以前にも無論多くみられるが、全唐詩をみても、「簾」が詩的表現の素材として使用される例は

地としての鑑賞とは、必ずしもいえない。

白氏は草堂創建以前にも屢々香鑪峯周辺に行遊しているので、この辺一帯は熟知していた。恐らくは、その時の経験をふまえて書かれたものである。

こういふ見方からすれば、第四首の第三句「遺愛寺鐘欵枕聽」の鐘の音についても、第一句「日高睡足」と時間上やや矛盾する如く思われ、この詩作時に於ける直接的経験というよりも、蘆山周辺の、従来全経験の中より、詩的必要から、つまり、「撥簾」して香鑪峯の雪をみる動作への契機として、「鐘」の句が必要であったものと思われる。

(3) 杜甫には、この外にも「撥悶」（題名）(11428)や「已撥形骸累」（長吟）(2906)等の例があり、三例とも「スツ」という訓が適当と思われる。また、前掲、李白の「悔虚名撥向身之外」（悲歌行）にも、同様の語感を認め得よう。

極めて多い。いま、白氏文集のうち、簾を払って白鳥起つとか、簾を透して花を観るといふような例は総て省略し、差当り、この個所に該当する必要なもののみを挙げれば、次のようになる。

(4)「卷」「捲」 簾を卷上げる動作を示す最も普通の例であり、「卷」が十二ヶ所〔うち、一例に「簾高卷」(822)とある〕、「捲」が一ヶ所で、他の用例に比して、数も最も多い。

この字が使用される場合、その詩篇に含まれる気候的環境を、個々について検討すると、早春に始まり、初夏、夏、秋の季節の何れかに該当し、簾を卷上げること避けねばならない程の厳冬に当るものは、一例も見当らない。全唐詩には、内容的にこれに応ずるところとく、「垂簾却避寒」(韋応物 0891)や、「褰簾雪未乾薄」(王建 15672)の例がみられる。

ただ、卷五十三「閑臥 2329」には「望_レ春春未_レ到」とあるが、これとて「簾卷_レ侵_レ牀日」とあって、室内に陽光を入れる為簾が卷上げられていて、一篇中、何処にも寒氣に關する言葉は見当らない。また、卷五十一「別_レ氍帳火爐_レ」では、「氍_レ簾_レ逐_レ日卷」。香燼_レ隨_レ灰滅」とあり、その前に「遽_レ變_レ陽和節」ともあって、氣温の変化と、「卷簾」が相併行している事が明示されている。

また「卷簾」が使用されている詩は、全体として、何れも比較的明るい内容をもち、前記、首題の香燼_レ下_レの詩の内容とは、稍々趣を異にしている。

尚、「高卷幕」(卷五二・和寄問劉白 2359)という例があり、「幕」ではあるが、これも寒氣とは無關係である。

(5)「褰」 これは九例あり、〔うち、一例に「高褰簾」(2412)とある〕「卷」に次でその数は多い。「褰」は説文に「褰、袴也」とある。「褰裳涉溱」(詩鄭風)「暑毋褰裳」(礼曲礼)とあり、「揭」と同義に用いられた。後に触れる如く、唐時代には「褰簾」の用例は多くみられる。観智院本名義抄には「ハカマ」の外に、「カ、グ・アカル・カキル」等がみえる。尚、「簾每_レ当_レ山卷。帷_レ多_レ待_レ月褰」(卷十九・新昌新居書_レ事 1259)の例からすれば、「簾」には、「卷」の方がより適切であるとみられようか。「褰簾」の外に、「褰裳」が四例、「褰帷」が一例みられる。

「褰」を氣温との関連からみれば、略々前項と同様である。一例(卷二〇・郡楼夜宴留客 1338)は「褰簾」とありながら、「寒_レ天特

未曉」とあるが、これとても、客と共に「褰_レ簾待_二月出_一。把_レ火看_レ潮来」のであって、寒気を怕れてはいない。また、「春夜喜雪」(巻一四・0756)で「明_ニ宜_ニ滅_レ燭後_一。淨_ニ愛_ニ褰_レ簾時_一」とあるのも、寧ろ春雪を喜び、ここでも寒気には全く触れられてはいない。ただ、ついでながら、

新年多_ニ暇_一。日_一晏_ニ起_レ褰_レ簾坐_一。睡_ニ足_ニ心_ニ更_ニ慵_一。日_一高_ニ頭_ニ未_レ裹_一(巻八・郡斎暇日 0362)

をみれば、慵_レい気持の動作的表現として、「撥簾」の「撥」と、略々同様の心的状態の時に「褰」も使用されている。こういう例からすれば、外界の寒気を怕れる気持を除けば、二つの言葉の用いられ方を、それ程峻別して考える必要もなさそうである。

(イ)「掲」その他 (ロ)を除けば、他は何れも用例は少ない。

「掲」 「閑_ニ多_ニ掲_レ簾入_一。醉_ニ便_ニ擁_レ袍_ニ眠_一」(巻六四・青氈帳二十韻 0306)の一例がある。

「開」 「開_レ簾望_ニ天色_一。黄_ニ雲_ニ暗_レ如_レ土_一」(巻五・効陶潛体詩十六首ノ二・0214)の例があり、これとは逆の場合が、「合」であり、「迎_レ寒簾幕_合」(巻五十二・葺池上旧亭 2385)がある。夫々一例である。

簾を上方に上げる動作の逆の場合に、「下」が八例あり、「垂」が一例認められる。

→「撥」の用例について 説文は「治也」。礼記曲礼に「衣_母撥_ニ足_母蹶_一」とあり、注に「蹶揚貌」とある。また文選(巻三五・七命八首)に「口_ニ齧_ニ霜_ニ刃_ニ足_ニ撥_ニ飛_ニ鋒_一」とあり、九条家旧蔵本には「除也」と傍注を施す。

白氏文集には、「撥」に関して、「撥簾」の外にも、多くの用例がみられる。いま、「撥乱」等、「治」の意に解せられる二例(「撥乱」0125・「撥世乱」1416)及び、琴の撥等用具としての使用例を除けば、次のようになる。

(1)未_レ撥_ニ落_ニ盃_ニ花_一。低_ニ衝_ニ批_ニ面_ニ柳_一」(巻八・泛春池 0391)

(2)転_レ軸_レ撥_レ絃_三一_二兩_一声_一(巻二二・琵琶引 0603)(外に、「絃清撥利」1302・「胡琴鉞撥指撥利」2200・「撥撥絃絃」2645がある)

(3)擗_ニ撥_ニ詩_ニ人_ニ興_一。勾_ニ牽_ニ酒_ニ客_ニ飲_一」(巻二五・題盧秘書夏日新栽竹二十韻 0808)

(4)披_レ雲_レ撥_レ水_環。山_ニ繞_レ野_一(巻二二・朱藤話 1430)

(5) 腕ウデ 軟撥カクハ 頭輕カクヘ (卷五四・聽琵琶妓彈略 2505)

(6) 叱シ 撥駒ハクキ (卷六四・同諸客嘲雪中馬上妓 3105)

(7) 棹遣シロシテ 禿頭ハゲ 奴子ヌコ 撥ハク (卷六六・池上逐涼ノ一 3285)

(8) 閑撥ヒラハク 船行フネユキ 尋ヒト 旧池キウチ (卷六八・感旧石上字 3429)

この外に、

(9) 游魚撥ユウイハク 蓮田レンデン (卷三・昆明春水滴 0135) (那波本作撥撥、神田本等に抛り改む)

(10) 網アミ 初鱗撥ハツリンハク 刺サシ (卷一七・自江州司馬授忠州刺史 1089)

の二例がある。

作品数の多いことにも起因しようが、白氏文集には、以上の如く、「撥」の用例は他に比して、際立って、多きを数える。

以上の用例から、先ず、「撥簾」は、白氏文集の中で、首題の詩一ヶ所のみで使用されていることが知られる。これらの用例全体をみると、「撥」は夫々、意味を異にするけれども、(1)(4)(6)等は、何れも、極めて動的で、動きが比較的早い。弾力に富む点認められる。ただ、総てがそうであるわけではなく、(3)(5)などは、特別、弾力的とはいえない。動作が明瞭な形では示されないもので、後に説く如く、「撥簾」に対して、わが国では、適切な訓を施すことは、必ずしも容易ではなかったと思われる。

「簾」に関する、また、「撥」についての白氏文集の用例は以上であるが、用例の範囲を更に拡げて、全唐詩をも検討する。尚、「撥簾」については、『佩文韻府』にも、白詩以外の用例は記載されていないが、「撥」について、白詩に挙げられた用例以外で、注意を要するものの有無をみておく必要がある。

先ず、白氏に最も近い元代の『元氏長慶集』をみると、「簾」に関しては、「高捲」(卷二二・21368)、「開」(卷五・21006)、「払」(卷六・21026 卷七・21073 卷一五・21266)の如く、白氏文集にもみられる例の外に、

莫遣擁簾傷思婦。且將盈尺慰農夫 (卷二二・酬樂天雪中見寄 21563)

翰促節類催。漸繁撥珠幢。斗絶金鈴掉。千叔鳴鑄釜（卷二四・五絃彈 21600）

の例がある。後者の「撥」は白詩用例中の(5)と略々同じく、上への動作を示し、「アグ」等の訓が適当であろう。「撥」については、この一例以外には、特に挙ぐべき例は認められない。

次に唐代の用例集という意味から、『全唐詩』をみると、「簾」に係わる語については、当然のことながら、「卷」「捲」の使用例が際立って多い。「褰」は予想外に少なく、その代りに「開」が比較的多い。その他、少数ながら、「上」「翳」「懸」等がある。「簾」を下す場合は、「下」「垂」が共に多い。

これらのうち、「卷」「捲」をはじめ、「簾」を上方に上げる語が使用されている詩篇を総て検討したが、白氏文集の場合と同じく、嚴寒の頃のものは見当らない。雪に関係する比較的稀な例に於ても、

五更初起覺風寒。香炷燒來夜已殘。欲卷珠簾驚雪滿。自將紅燭上樓看（王涯・宮詞三十首ノ三 18218）
では、雪寒のため、結局、「卷簾」はなされないし、

寥寥深夜雪初晴。楼上雲開月漸明（中略）広庭積素偏相映。珠簾卷却光更深（権徳興・旅館雪晴 17344）
も、寒気よりは、積雪の美に焦点が合されている。

次に、全唐詩に使用されている「撥」の例は、無論、少くはないが、先に挙げた、元白両氏の用例を補うものの中、「主人若也勤挑[↑]撥」（南唐先主李昇 00310）の「撥」は、訓を施すならば、「アグ」が適当と思われる数少い例である。

以上、白氏文集、元氏長慶集をはじめ、全唐詩の用例からみて、管見では、「撥簾」は香鑪峯下の詩以外には見出し得ず、白氏の造語と見做して、略々間違いないものと思われる。

これは、白氏より少し後になるが、

新創仙亭覆石壇。雕梁峻宇入雲端。嶺北矚猱高枕聽。湖南山色捲簾看（沈亜之・題侯仙亭 20099）

は、恐らく、香鑪峯下の白詩をふまえて作られたと思われる、これは、当然、「捲」が使用されて然るべき情況であり、ここに「撥」を

充てることが出来ない。

とすれば、「撥簾」の語は、山雪、寒氣、閑寂、幽独、慵情などと、特殊な条件が揃った環境下において、しかも、白氏によって、初めてなし得たものといえよう。⁽²⁾

註(1)「撥」の用例について、先に挙げた元白両氏の例を補足するもの若干を示す。

「河畔垂楊撥不開」(宋之問 03226) 「悔虚名撥向身之外」(李白 08099) 「終然振撥損」(杜甫 10745) 「通撥刺月銜」(顧況 13618) 「毬場慢撥幾人随」(楊巨源 17691) 「紅撥一声颺輕毬」(皇甫松 19465) 「自願撥不転」(盧仝 20569) 「銜花金鳳当承撥」(李紳 23589)

(2) 全唐詩第十二函第十冊には、当代の「詞」が収められ、文学的素材として、「簾」を含む作が極めて多く、寧ろ、頻出するといえる。一方、詩作についてみると、李商隱、李賀等に「簾」の使用は率では極めて多く、韓愈、柳宗元、劉禹錫等では逆に、極めて少ない。白氏も無

論、前者の、多い中に入る。この事は、各人の詩作の内容そのものと無関係ではないと思われる。

また、「撥」も「池魚撥撥」の如く、擬音的に使用される例もあり、これは俗的表現に近い。全唐詩「諺謎」類の中にも、「擦撥」「紅撥一声」「捍撥」「輕撥」「痛撥」等の例が多くみられる。とすれば、一貫して、平易な表現を愛した白氏の文集にのみ「撥簾」の一例がみられることは、意味深いことといえよう。

尚、その後、『玉台新詠』巻五に、「清夜未三云疲。細簾聊可発。玲玲玉潭水。映見蛾眉月(下略)」(和繆朗視月)を見出した。「撥」とこの「発」とでは、若干意味するところが異なるかにみえるが、一応挙げる。

三 (1)

周知の如く、白氏文集は平安朝以来わが国では盛行し、多方面に影響を与えた。明治以後、優れた研究も少くはない。ただ、白詩受容についていえば、原詩とその訓に即した精密な研究は余りみられず、例えば、当面の問題として取上げた、「撥簾」の「撥」が、わが国で如何に読まれたかという、一見、周知と思われれることすら、基礎的検討を経た上で、確定的にならなっているわけではない。

いま、ここでは、この問題を邦人漢詩文集と、白詩訓点・仮名文の二面から考察し、この項では、先ず、前者について述べる。

わが国漢文学史に於ける白詩受容については、何れ稿を改めて述べようと思うが、当時の文人の詩文集の多くは佚逸し、或は残巻が伝えられている程度で、しかも、現存鈔本も殆んどが江戸以後に限られる。これら一部分に限られた資料から全体を観ることは、多くの困難を伴うのである。こういう事情を考慮に入れても、猶、菅原道真や都良香の時代が、白詩受容史の上で一頂点をなすことは、恐らく、異論は無いであろう。この事は、例えば、既に先人が引いた如く、都良香の『集七十巻。盡是黄金』で結ばれる「白楽天讚」(『都氏文集』卷三)の、簡潔の言葉の中に、よく白氏の全貌を表現し得て妙である点などからみても知られるのである。

前述の如く、白氏が唯一度使用し、その後、唐詩から永く姿を消した「撥簾」という表現が、道真の注目するところとなった。その詩眼の高さと確かさとが偲ばれる。『菅家文章』には、この語が実に四度に亘り使用され、また、「撥」のみについては、多くの用例もみられる。いま、「撥簾」の用例について検討する。

■「山陰亭冬夜待月」(卷二) 先ず全文を挙げる(岩波大系本により、訓点は若干改めた。以下同じ)。

高^ニ齊^ハ待^レ月^々何^レ淹[。] 不^レ畏^ニ風^霜幾^撥簾。 海^伯応^レ備^レ投^ニ老^蚌。 山^神欲^レ惜^レ放^ニ寒^蟾。

消^ニ残^砌雪^心猶^誤。 挑^ニ尽^窓燈^眼更^嫌。 珍^重東^頭光^数尺。 如^レ无^如有^独織^一々。

第二句を、大系本「畏りず 風霜の幾たびか簾を撥ふことを」と訓み、且つ、頭注に「この言表の背後に、当時詩人無用論などが横行した社会風潮のきびしさが菅家廊下に及んだことをも諷している。」とある。筆者は共にとらない。「風霜」が主格ではなく、「撥簾」の主体は道真自身である。

この詩は、明かに前述、香鑪峯下の詩をふまえている。そして、「不^レ畏^ニ風^霜幾^撥簾」の「不^レ畏^ニ風^霜」は、白詩の「不^レ怕^寒」に対応する。筆者前述の「巻簾」は、外界の寒気の際にはこれを避けることを、道真は充分承知しており、従って、白氏が、「巻」を用いずに、殊更、「撥」を使用したことも充分理解した上で、この語を受け容れたものと思われる。その意味で、まことに正確である。但し、白詩の诗情からみて、「撥」に「備」の語感をも含めるとすれば、「幾」は如何であろうか。

この詩の中には、外にも、「応備投老蚌」の傍点字は、白詩の「猶備起」に、また、「砌雪」は同じく「夏月涼灑砌」(香鑪峯下詩ノ一)に、或いは、対応していると云い得よう。

「書齋雨日独对梅花」(卷一) 前半を略して挙げれば、

紙障猶单 依樹立 蘆簾暫撥 引香廻 書齋对雨閑 無事 兵部侍郎與猶催

とある。香鑪峯下の詩ノ一の「紙閑」「蘆簾」に、この詩の「紙障」「蘆簾」は、夫々、対応するとみてよかるう。

これは梅の季節であり、特に寒気を怕れることはない。外は雨であり、梅の香りが部屋に入る為ならば、簾は少し上げるだけでよい。従つて、この場合、「簾」を「巻」き上げるのは相応しくない。その意味で、この「撥」は白詩の詩情に合致しているといえる。

「早春侍宴仁寿殿同賦春暖应製并序」(卷二)

ここでは、詩の中にはなく、その序文の中で使用されている。首よりその一節を引けば、

春之為氣也、霏々焉、漢々焉、鶯瓦雪銷、見天下之皆就暖。鳳池氷治、知天下之不受寒。時也翠幌高開、珠

簾競撥。留万機於一日、翫三春於二句。(下略)

とある。春風陽和の候であり、寒気の怕れはなく、陰雨もない。「鶯瓦雪銷」は、長恨歌の「鶯鶯瓦冷霜華重」に対応はするが、無論、

春の装いに改められている。尚、序に続く詩中の「語鳥千般皆德煦。遊魚万里半恩波」は、白氏文集卷三(新樂府)の「龜尾曳

塗魚煦泡。詔開二分水注恩波」に対応する。「煦」をわが古鈔本は「アキトフ」と訓み、靈池が干上り、魚が纒かに残る泡を呼吸

するといふ意味であるが、道真はこれをふまえて、「德煦」と、巧に頌辭に転化させている。(2)

序に戻るが、翠幌の「高開」に対し、珠簾の「競撥」の「撥」は、白詩の例に徴すれば、必ずしも適當とは思われない。寧ろ、前に

挙げた元稹の「漸繁撥珠幢」の「撥」に近いとみられよう。

「簾」を上げる動作に関する用例としては、外に、「御簾卷却月鈎新」(卷四)の一例があり、また「簾」についてはないが、

「翠幕晚来寒」(後草)の例もあり、この「巻」、或いは「寒」の方が適當ではなからうか。文章には、簾関係の四例以外にも、

「疑雷撥夏雲」(巻五 415)「撥蘭亭」(巻六 456)の例があり、道真はこの「撥」に、かなり関心を示していたものと思われる。

「晨起望山」(巻四) 七言絶句である。これを挙げる。

不寐三通宵直到明、ホキスカラ、ニ 蘆簾手撥对三山晴。ユヅカウカケ、セキ 避人猿鳥松蘿裏、ニ、ケツ、ヲ、ト 唯有飛泉雨後声。ニ、ト、ラフ、ノ、ミ

雨後である。無論、寒気はない。とはいえ、独居、静閑、慵惰の点では、白氏香鑪峯山居の詩と同類ともいえるし、白詩をふまえていることは明かであろう。その意味で、「撥」の使用は適切であるといえる。尚、「手撥」については、孟浩然に「手撥金翠花。心述玉紅草」(07622)や、崔珏に「手撥絲篁醉心起」(32698)等の用例がある。

『菅家文章』にみえる「撥簾」の例は以上である。仁寿殿応製詩序の場合は、稍々白詩と異なる用法の「撥」といえようが、その他の三例は、流石に原詩のニュアンスが巧にとらえられている。

道真のこの例を除けば、従来知られる平安末期迄のわが漢詩文集には他に見当たらないが、更に追加すべき用例を一例挙げる。それは、既に、川口久雄氏により紹介された『中右記部類紙背王朝漢詩集』(九条家旧藏平安末鎌倉初間写)に収められている。

卷五紙背詩^{一四}

長治元年(1104)十一月十日 白雪滿庭松十一首 / 七言冬日於因州員外刺史書亭同賦白雪滿庭松詩^{以案為一}〔本文は『圖書寮叢刊』(平

安鎌倉未刊詩集)に拠る]

(参加した十一人は、大江家因

史記延久五年、藤原敦基

博士、平祐俊、藤原尹時、藤原宗兼

文へ文、藤原

敦光

博士、(藤原)公明、藤原実光

敦光^(文章)、(藤原)公明、藤原実光^(文章)、藤原令明^(文章)、藤原資光^(頭)、藤原知明^(後、茂明と改名)^(文章)である。()内は、全部が

詩作製当時の現職ではないが、何れも文道に携わる者の集りといえる。尚、附言すれば、敦基、敦光は兄弟であり、その父は明衡である。令明、茂明は兄弟であり、父は敦基である。宗兼の父敦宗、祖父実政は共に文章博士である。実光と資光とは兄弟である。

更に、これらの人の中、特に白氏文集との関係を記せば、大江家は代々文集の侍読の家柄である。敦光は当代切つての学者・文人であると共に、『本朝無題詩』等の詩には白詩の影響が濃くみられ、且つ白氏文集を所蔵していた事は、資料に徴して明かである。⁽⁴⁾ 知明は神田喜一郎氏蔵白氏文集巻三・四(新楽府) 天永四年(1126)点の加點者として知られている。祐俊は、歌人として著名な平兼盛や、赤染衛門の一統であり、同族に歌人が多い。敦光と同じく、白氏文集を所蔵していた事は資料に明かである。⁽⁵⁾

十一首のうち、当面、必要な三首を挙げる。

(散位簾看字様)
粉々白雪撥簾看。剩滿庭松望裏寬。光風標簾下乱。色埋雨蓋砌前寒

窓梅交染花俱綻。離竹濕陰煙不乾。每屬玄冬雖照說。無成獨取旁心肝

(采内既卷)
終朝翫雪土盤桓。旁滿庭松與未闌。百尺月斜排戶望。数株花重卷簾看

門賓仮蓋衣還濕。沙鶴馴枝翅共寒。歳々対来論勁節。大夫樹与記言官

(文章得業生命題)
庭上移栽松樹擗。滿来白雪自团々。低枝欲掃玉度積。高蓋不遮沙月寒

華髮衰翁携杖立。粉顔佳妓倚簾看。久伝累葉家門業。聚汝年々其幾般

ここで、計らずも「一簾看」が三人により採られたが、「寒」韻という制約があれば、当然起り得ることであり、この三人以外でも、他の二人が「看」を韻字に用い、他の三人は韻字としてではないが、句末に用いている。しかも雪が題材ともなれば、この顔触れならば、「撥簾看」を含む白詩が想起されるのはごく自然であろう。

三首のうち、宗兼作の「撥簾看」は、白詩をそのまま取るが、この外にも、「簾下」は白詩「南簾」と、「砌前」は白詩「灑砌」(共に五首ノ一)に対応し、更に、「窓梅交染花俱綻。離竹濕陰煙不乾」は白詩「野麋林鶴是交遊。雲生澗戸潤衣裳」(五首ノ三)に対応するとみられよう。「簾」についてみれば、「紛々白雪」に対して、「卷」は用いられず、当然、「撥」にすべき場合である。

敦光の作も、白詩をふまえていることは明かであり、「門賓仮蓋衣還濕。沙鶴馴枝翅共寒」は、宗兼と同じく、「野麋」の一聯に対応する。ただ、雪とはいえ、宗兼の作とは稍々異り、「撥」にする必要はない。敦光が、当然、白詩を意識しつつも、「撥」を使用せず「卷」に改めたのは、「撥」の意味を充分に理解した上でのことは云う迄もあるまい。

令明の作は、元来、白詩と発想を異にするので、ここでは触れない。「一簾看」と続く用例は、唐詩には稀ではない。

以上、道真と、平安末期の第一級の文人の作からすれば、「撥簾」と「卷簾」とは明確に区別されていたことが知られる。ただ、管見では、中国のみならず、わが国でも、「撥簾」の用例は稀であり、これ迄のところ、以上挙げた五例に止まる。

次に、平安朝漢詩文に於ける、これらの語の使用に関する一般の傾向を知る為に、現存漢詩集（新校羣書類従第六文筆部所収分）をみれば、「簾」に係わる語としては、『菅家文章』の場合と同じく、「卷」「捲」が最も多く、「褰」がこれに次ぎ、「開」「上」が各一例宛認められる。外に、『本朝文粹』には「漸挑簾帷」（卷二）の一例がある。

「撥簾」という表現ではないが、「簾」の上げ方を、単に「卷」や「褰」のみに止めずに、修飾辞「半」「閑」を加えて、「撥」に幾分近づけた例が認められる。（唐代の詞には「慵卷」の例が数例認められるが、わが国には流石にこの例は無い）。そういう一例として、藤原周光「秋日言志」（本朝無題詩卷第五）の一節に、

十步芝蘭如入室。三間芦葦半褰簾。一觴詠興無_レ尽。遮莫今宵鐘漏淹

とあるのは、白氏香鑪峯下詩をふまえたものとみるべく、「三間」は同詩ノ一の「五架三間」に対応すべく、「半褰簾」は同詩ノ四「撥簾」に対応すべきものとみられよう。とすれば「半褰」は、表現を変えてはいるが、「撥」に対する作者の解釈の表われとも見做されよう。これと同じく、藤原季綱「月火言志」（本朝無題詩）の一節の、

清霜弥_レ洋開_レ窻_レ。白雪自調_レ在_レ座琴。胡管秋声遙_レ遣_レ思。南楼眺望幾_レ傷_レ心。

閑褰_ニ簾箔_一有_ニ余興_一。何必刻_レ溪足_ニ遠尋_一。

に用いられる「閑褰」は、詩情からすれば、「撥」に替えて得る個所と思われる、作者が意識的であったか否かは、無論明かではないが、自から「撥」に近い表現になったといえようか。

『本朝無題詩』には歴代漢詩文中（白詩受容以後）、白詩の影響が最も顕著にみられる。白氏がいう「詩魔」という言葉が屢々ここにも引かれ、或は、「新楽府」の詩句が数多く採られ、無論、それは、白氏文集の他の巻にも及んでいる。その白詩よりの投影個所は、枚挙に暇がない程である。それにも増して、

緑樹陰前徐避_レ暑。閑披_ニ白氏古詩_一吟（卷五・藤原茂明）

白氏古詞詠_ニ紫藤_一（白氏文集慈恩寺三月三十日詩云。紫藤花下漸黃昏）（卷九・藤原明衡）

白詩六義專吟詠。玄理一圓闡論談。(卷五・菅原時登)

と、当代有数の文人達が、これ程、直接的な表現で、白詩に言及しているし、或いは、

白氏昔詞尋寺識。紫藤晚艶与池巡。(卷九・惟宗孝言)

白楽天詩披月驗白氏文集有老住香山初到夜。秋逢白月正圓時之句。故云。(卷九・藤原基俊)

などは、白詩を作詩の規準とするなど、何れも、白氏文集への傾倒を如実に示して余蘊がない。

この中に交って、

客路誰通逋雪曉。老情難慰待春時。独斟玉盞青田酒。閑詠香鑪白氏詩。(卷二・菅原在良)

籬暖草抽新縷色。溪寒鳥祕破袍声。遣懷外土鐘峰昔。詩主楽天老任情。(卷一〇・釈運禪)

と、香鑪峯下の詩も屢々みられる。この中で、源経信の作である、

地下勝形向碧湍。一朝迳到叶幽閑。石階苔滑灑春水。柴戸門深入暮山。

歛枕空望郊野路。言詩暫忘毀譽間。淹留此処多情感。感及黃昏未及還。(卷六)

は明かに、白氏香鑪峯下詩を意識に入れ、「石階」(一首)に、「灑春水」は、同じく「夏月涼灑砌」(一首)に、「歛

枕空望」は、同じく「歛枕聽」(四首)に、「暫忘毀譽間」は、同じく「免見啾啾毀譽声」(二首)に対応する。ただ、この詩には、「香

鑪峯雪撥簾看」よりの投影個所は見当らない。

この事は、香鑪峯山下の白詩が、単に、断章された「歛枕聽」や「撥簾看」という句に対する愛好に止まるものではなく、寧ろ、こ

の詩全体に、つまり、その文学的表現と、そこに示されている白氏の、山居という生き方にこそ、文人達の関心が寄せられていたこと

を明かに示している。断章され、佳句の蒐められた『和漢朗詠集』をみても、香鑪峯下の詩は、「宦途自_レ此心長別。世事從_レ今日不_レ言」

(第五)も収められ、外に、「廬山草堂夜雨独宿……」(卷十七)や、卷十六・十七の江州時代の作は十八首も採られている。

この期の白詩への傾倒は、ただ漢詩文のみに止まらず、和文にも明かに反映しており、例えば『源氏物語』をみれば、「撥簾」を含

む一聯をふまえた表現がみえるのみでなく、江州時代の詩をふまえた個所も、数ヶ所認められ、文人達の白氏の生き方に対する関心が、そのまま受け容れられている。光源氏須磨流論に際し、その携行書籍に白氏文集を挙げたのは、白氏、江州遷謫の悲嘆をふまえて、卓抜の手法といえよう。和文にみられる漢籍の引用は、女流による、佳句の独自の蒐集によるものではない。謂わば、文人等の詩囊の一端が、或いは、女房文学の中に、また、宮廷場裡に、華やかに紹介されたに過ぎないのである。学問の衰微に比例して、朗詠集が重んぜられるようになる。確かにそれは佳句の精粹ではあるが、その底辺に、永年に亘る蓄積の存することを知る必要がある。その佳句を繞って、宮廷に於て、女流のみでなく、文人達も加わって一種の知的遊戯が展開されるが、これは飽飽も余技であり、遊戯であって、そこにみられる佳句の扱われ方のみを以て、彼等の、漢籍に対する受容や理解の程度を云々することは、敢て慎まねばならない。文人達の漢学の素養に関しては、先ず、その漢詩文の検討が先である。

註(1) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』(第一冊)を参照。

(2) 「煦」を、大系本、「みな徳の煦あだかなり」と訓むは、意明かならず。文集卷三神田本は「アキトフ イキツク」の両訓を施す。ここでは、原詩の主格魚が鳥に替っているもので、「アキトフ」は不適であるが、「イキツク」はそのまま、生かされる。白氏文集万治版本は「イキツク」を施す。名義抄は正字(仏中三〇)には「イキツク アツシ アギトフ」とあり、俗字(仏下末五三)に「アタ、カ ヤク アキトフ」とある。

(3) 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』(下)
(4)(5) 尊経閣文庫蔵白氏文集那波古活字本への、古鈔本よりの転写本奥書によれば、その巻五九一六八までの若干

の巻に、大治四年(1120)より天承元年(1131)にかけて、式部大輔藤原敦光の本より息那光が移点した本奥書がある。巻五十九尾題前には「本云大治四年四月中以式部大輔之本進士邦光点之也云々」とある。また、同じく尊経閣本の巻一一五七までの若干の巻には、保安元年(1120)より大治二年(1127)にかけて、藤原宗重(『中右記』の撰者宗忠息)が平祐俊の証本より移点した旨を記す本奥書がある。巻十一尾題次余白には「保安五年初二月中旬以平祐俊之証本自以移点了(下略) 藤宗重」とある。詳細は、拙稿「内閣文庫蔵菅見抄と「越抄」について」(『金沢文庫研究』一八一—二)参照。

(6) この言葉は、既に、菅原道真も使用している。例えば、『菅家文章』巻四「秋雨」に、「閑境併詩魔」とある。

(7) 『源氏物語』に引かれた白氏文集の巻次による分布の概略をみれば、巻二秦中吟、巻三・四新樂府、巻十二長恨歌伝・長恨歌が多く引かれることは、よく知られている。これに次いで多いのが、巻十六・十七であり、この両巻には江州時代の詩作が収められている。また、巻二十六の江州山居の記である「草堂記」も数回引かれる。

巻十六・十七所収の詩からは、香鑪峯下の詩が引かれるのみならず、「庾樓眺望」(0961)や「官舍閑題」(0920)や「薔薇正開」(1055)等は、何れも流謫の窮態を詠じたものである。とすれば、江州時代の白詩は、かなりの比重を以て、採り容れられたことになる。

(2)

次に、「撥簾」に対する平安時代以来の訓、及び、和文について検討を加える。

香鑪峯山下の詩は、前述の如く、白氏文集巻十六に収められている。この巻の平安時代鈔本は現存せず、また、鎌倉時代の鈔本ではあるが、本文としては、日中兩國を通じ、現存本中最も信用の置ける金沢文庫旧蔵本もこの巻を欠き、これに代る、然るべき鎌倉時代の鈔本も未だ見当らない。

この外に、白氏文集より、適宜、詩文を抄出した所謂選抄本があり、そのうち、『文集抄』(平安中期写酒井宇吉氏蔵)や、『管見抄』(正元元年(1239)成立、永仁三年写内閣文庫蔵)には、共に、この詩が収められるが、訓点は後者のみに施されている。

定家自筆の『源氏物語』奥入』には、引用白氏文集に、その総てにはないが、詳細な訓点が施されていて、貴重である。但し、総角の巻の注に、この詩は引かれるが、訓点は施されていない。

『千載佳句』『和漢朗詠集』には、共にこの詩は収められている。前者に、訓点の施された鎌倉時代鈔本が現存するが、未見である。その転写本と覚しき内閣文庫蔵本(本奥書には正安二年(1300)の年号がみえる)には、ヲトト点・訓点を施すが、この句には無い。朗詠集平安時代鈔本(断簡)には、訓点の施された本も現存するが、全巻に亘り、訓点の施されたものは極めて稀である。鎌倉時代以

後では、訓点の施されたものも、比較的多く現存する。とすれば、朗詠集の訓は、この検討には極めて有力な資料となり得る。

以上、基本的資料は多くはない。朗詠集の鎌倉・室町時代鈔本の訓点調査も未だ充分ではないが、いま、そこに施された訓を中心に、「撥」について検討を加える。(その後、朗詠集訓について増補し、これを末尾に「補」として附した。)

「撥」につき、『篆隸萬象名義』に「撥補遺反前絶」とあり、このうち、白詩への適用範囲には「除」が存する。観智院本名義抄には「上鉢ヲサム ハラフ スツ ノソク カ、ク コハル オコリ オサフ ヒラク ハシク マネク アバク シシム ヤフル」がみえ、傍線を施したものが、一応、ここで採りうる可能性のある範囲内のものである。

前記訓点資料で、この名義抄に所載されているのは、「カ、ク」である。外に、貞享元年・天明二年等の刊本にみえる「ハラッテ」がある。前記資料では、この他に、「マキアク」「マイテ」「アク」「ツイハテ」「ラシハテ」等がみられる。また、和文の中で、「籒」に係わる語としては、「まきあげて」「あげ」「ひきあげて」「かかげて」「おしはて」等がみられる。

以下、個々の語について述べる(訓点の施された朗詠集の調査終了の段階で、論旨変更の要があれば、更めて、補訂を加える)。

(諸本の略称は次の通り)

〔管見抄〕…内閣文庫蔵清原教隆加点永仁三年写本

(以下、朗詠集)

〔東急本〕…大東急記念文庫蔵南北朝写本

〔東急菅本〕…同嘉暦元年写本(奥に永正四年菅原和長の手跋あり)

〔尊経閣寂本〕…尊経閣文庫蔵伝釈寂然筆本二帖

〔尊経閣二条本〕…尊経閣文庫蔵嘉禎四年二条為氏筆以菅原為長自筆本移点本二帖

〔静嘉堂本〕…静嘉堂文庫蔵伝後宇多天皇宸筆本二帖

〔山田本〕…故山田孝雄氏蔵文安四年写二冊

〔教順本〕…高野辰之氏旧蔵室町末写本二冊

〔寛正本〕…高野辰之氏旧蔵南北朝写本二冊

〔内閣文庫蔵〔室町末〕写本二冊 〔陵安貞本〕…宮内庁書陵部蔵江戸写安貞二年本奥書本二冊 〔陵伏見本〕…同伏見宮家旧蔵本〕…内閣文庫蔵〔室町末〕写本二冊

〔寛欽法規王筆本一冊 〔陵別本〕…同室町写本二冊 〔陵又本〕…同蔵本二冊 〔陵谷森本〕…同谷森善臣旧蔵天正八年水無瀬兼成写本

一冊 〔寛寛永刊本〕…同寛永十八年刊清家訓移点本二冊 〔国会本〕…国立国会図書館蔵室町末写本二冊

〔阿克〕…これは「マキアク」の「マキ」が表記されない訓とも解し得るが、別訓として扱う。内閣本はこの一訓を施し、〔補〕に

示した通り、早大永禄本・同弘治本・東大残花本も、右傍、或は、右傍内側にこの訓を施す。外に、和漢朗詠集私注(平安末成立・室

町時代写本多数存す)には、概ねこの訓を施す。現存訓点本には、それ程多くはないが、和文に「簾をあぐ」の例は極めて多い。

「カ、ケテ」 管見抄本・東急本・尊経閣叙本・山田本・陵谷森本・陵寛永刊本の六本は、この訓のみを施し、東急菅本・陵伏見本は、右傍にこの訓を施し、左傍に別訓二種を加えてある。また、尊経閣二条本は右傍内側にこの訓を施し、外側、及び左傍に、夫々一訓づつを加えてある。更に、寛正本・陵安貞本は左傍にこの訓を施し、右傍に別訓を一つ、陵別本は、同じく右傍に別訓を二つ、夫々、加えてある。尚、国会本の「ケテ」の一訓は、「カ、ケテ」か。「補」に示した通り、この訓を右傍に施す本は極めて多い。つまり、「補」に示した(1)〜(8)迄の「カ、ケテ」は、本文に早くから加えられたものと見做してよいであろう。尚、博士家の系統でいえば、管見抄本・陵寛永刊本は明かに清家点であり、両本とも、この一訓のみが施されている。また、東急菅本・尊経閣二条本は菅家点であり、また、「補」の正嘉本・天理貞和本にも、菅家点がみられる。とすれば、「カ、グ」「マキアグ」が菅家点か。

この訓の原形「カキアク」の「カク」は、元来は、「葦垣の末かきわけて」(万葉集_上101)や、「眼に髪のおはへるをかきはやらで」(枕草子：うつくしきもの)や、現代でも用いる「雪かき」等の用例からすれば、払いのけるように上げる意に解し得よう。とすれば、「撥」の訓としては、寔に適訳といえる。後には殆んど混同して用いられるようになるが、「巻きあぐ」とは同義に解すべきではないであろう。朗詠集の訓としては、「補」をも含めて、対象となった点本に関する限り、早くから定着していたにも拘らず、和文で「簾をかかぐ」という例は稀であり、⁽¹⁾或いは、次第に、より明瞭な「巻きあぐ」が常用されるようになったのかも知れない。

「マキアク」「マイテ」 教順本には「マヒテ」一訓が施される。陵安貞本が(この本の訓はすべて朱筆である)右傍に「\マイテ」左傍に「カ、ケテ」とある外は、東急菅本・陵伏見本は、右傍に「カ、ケ」、左傍の内側に「マキアケ」、その外側に「ツイハテ」が施され、尊経閣二条本は右傍に「カ、ケテ」、その外側に「マキアケ」、左傍に「ツイハテ」があり、陵別本では、右傍内側に「ツイハテ」、その外側に「マイテ」、左傍に「カ、ケテ」が施されている。「補」の訓をも合せて、訓点の加え方からみれば、この訓は、「カ、ク」と共に、「撥」に対する最も基本的な二訓といえる。

前掲、中国の古辞書を承ける萬象名義や、名義抄にも、「マク」、或はそれに類似の意や訓は見当らず、また、既述の如く、「撥簾」

を用いて詩作した道真や、平安末期の一部文人達にも、「撥」と「巻」「捲」とは、明瞭に区別されていた。それにも拘らず、この訓が「カ、ク」と共に、屢々鈔本類に施されていることには、恐らく、それ相応の理由が存したに違いない。

更に、注意を要することは、本文上の問題である。既に述べた如く、香鑪峯下の詩中の「撥」は、日中兩國に現存する白氏文集鈔本・刊本類は、共に、本文が総て一致している。それにも拘らず、御物伝行成自筆本及び近衛家藏伝行成自筆本という、平安時代鈔本として、比較的良質の二本は、「撥」を「巻」に作る。これは、異本として検討する余地は少ないが、さりとて、誤写と断ずることは出来ない。そして、こういう本文をもつ本が、当時、成立していることは、その影響の可能性を考えれば、注目すべきであろう。「巻」に作る本文は、更に、外にも見出されるかも知れない。「マキアク」「マク」と、和文との関連については、後に触れる。

「ツイハテ」 「補」の蓬左文庫二条本は、右傍にこの訓を施し、静嘉堂本は右傍内側にこの訓を施し、外側に合点を附した「カ、ケテ」を加えてある。但し、この別訓は薄墨後筆であるので、元来は、「ツイハテ」の一訓であった。「補」の岩瀬延慶本は右傍内側に施し、寛正本・陵別本は右傍にこの訓、左傍に別訓「カ、ケテ」を加える。陵別本は右傍外側に「マイテ」をも加える。また、尊経閣二条本は左傍朱筆訓、陵伏見本は左傍外側の訓として施されている。

訓の施され方からすれば、この訓も古くからのものであろう。但し、古辞書類、及び、朗詠集以外の点本類や和文の何れにも、殆んどこの訓を見出すことは出来ない。「ツイ」は「ツク」とみられ、「ハテ」は促音の無表記と解せられる。「張」を充て得るとも考えられるが、この訓と類似の「ラシハテ」も三例みえるので、関連させて考える必要がある。

「ラシハテ」は、「補」の陽明文庫本、及び陵又本に、この一訓が施されている。古辞書には見当たらないが、和文にはみえる。

簾高くおしはりて、五節の君とて、されたるわかうどのあると、雙六をぞうち給ふ（源氏物語・常夏）

取りわかつべくも待らず。たゞこゝもにて御覧せよと言へば、あらゝかに踏み出づ。簾を押し張りて、枝を見はり給ふをみれば

（下略）（堤中納言物語・蟲めづる姫君）

前者では、体を押し簾を張り出す如くする動作を示し、はしたない様子を表わすとされる。後者も、略々同様であり、姫君が簾中

より毛虫を仔細に観察しようとする有様を描いて適確である。但し、両例とも、簾は張り出されて、やゝ湾曲はしても、その裾は上つてはいないと解すべきであろう。

この例をふまえて、朗詠の訓を考えれば、更に一步進めて、手をもって簾を斜前に張り出し、裾を床から上げて、香鑪峯を看るのになければならない。とすれば、和文の両例、更に、「落ちぬべきまで簾はり出でて」(徒然草)をも含めて、和文の例とは意味上若干の距りができ、「ツイハテ」「ラシナル」を、香鑪峯が見得る程に斜上に上げる意味で用い得るのか、稍々疑問が残る。但し、簾が短いのと解すれば、意味は通じる。名義抄に「除クツ」「排オス」の例があり、手懸りになるうか。何れにせよ、この両訓は「撥」翻訳上の苦心の現れと解すべく、同時に、「撥」が、元来は、「巻」「捲」等とは明かに区別されていた傍証にもなる。

「ハラフ」 鈔本類には、「補」の分を含めて、一本も見当らないが、江戸の刊本類には散見する。文選の「口𪔐霜刃^一。足撥^三飛^一鋒^二」(卷三五・七命八首)(文選六臣注寛永刊本に「ハラフ」を施す)にみえる例等は、瞬時に早い動作を要し、「ハラフ」という訓は相応しいが、「簾」の場合は、それでは室内から外が見えず、また、この訓では、道真の「簾暫撥」という表現は不可能になる。

以上、朗詠集に施された訓を中心にして、「撥」に対する訓を検討した。その結果いえることは、訓としては「アク」が「撥」の動作の方向を示した点で正しく、「カ、ク」は、「撥」の意味をつかんで、最も正確であり、「マキアク」「マク」は、中国の字書、用例、及び名義抄にもみえず、いわば意識の一種とみることが出来よう。これは、どちらが正確であるかという問題ではなく、訓読に於ける二つの異った態度とみるべきであろう。元来、「撥」そのものは、唐時代の用例からみれば、動作としては一定の明瞭な方向をもたず、早い動きを示す「ハラフ」「ハネル」が適当な例がある一方、上下、左右、何処へも動き、その時の文脈から判断されるような用例が多い。これを、「アグ」或は「カ、ク」と訓んだ場合、上への動作の方向を示した点では正確ではあるが、どの様に上げるかは不明のままである。それに明瞭な動作内容を附与したのが、「マク」及び「マキアク」であり、訓読に於ける一方向が示されている。但し、その結果、「巻」と「撥」との、原字のもつ区別は、翻訳としての訓読により、殆んど失われた。

訓読に於けるこれらの訓のうち、何れが早いかは、点本の現存状態よりみて、遽に決し難い。ただ、文字に即した訓と、意識的な訓

とは、当然、共に必要であり、常に併行して施される。これは、例えば、白氏文集卷三・四新楽府の中、平安末期迄に到達した多くの訓を略し網羅している神田本をみれば、一目了然である。⁽²⁾と同時に、当時の訓の実情を知るには、その一部に過ぎない現存鈔本の訓の施され方だけでなく、広く当時の資料、つまり、和文とも関連させて考えねばならない。鎌倉時代の鈔本には、前時代のものを継承しつつも、その時代の訓の特徴が表われ、平安時代の訓が総て伝存されるとは限らないからである。

源氏物語を始め、同類の当時の女房達による作品を検すると、前述の如く、「簾をかゝぐ」という用例は極めて稀であり、「あぐ」及び「まきあぐ」が一般的である。その中、いま、白詩の「撥」と関連があると思われる二例を挙げる（共に岩波大系本に拠る。以下同じ）。

簾をまき上げて見給へば、向ひの寺の鐘の聲、枕をそばたてて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて（源氏物語・総角）

三日になりぬる夜、降りける雪、三四寸許たまりて、今も降る。簾を巻きあげてながむれば、あなさむといふ声、こゝかしこに聞ゆ。風さへ速し。世の中、いとあはれなり。（蜻蛉日記・一四五）

源氏の例は、香鑪峯下の白詩をふまえていることは明瞭である。ここまで白詩との距りが少ないとすれば、作者は、白詩の本文を文集・朗詠等の何れに拠るにせよ、「マキアク」という訓の施された本に拠って、この詩を訓み、理解していたとみてよからう。源氏の他の個所、つまり、別に漢詩を意識的にふまえていない、他の日常語には、「まき上ぐ」「上げ」「ひきあげ」等が併用されている。

後者、蜻蛉日記の文については、大系本校注者川口久雄氏は、前者源氏と同様の白詩をふまえているとされ、角川全注釈の著者柿本奨氏は、それを否定される。但し、『奥入』その他、古注釈家ならば否定はしなからう。ただ、いまも雪が降り、風も速く、厳寒時に当って、唐詩では、態々「巻簾」のような用例は、例外を除き、皆無に近い。前章、藤原定兼の詩にも「紛々白雪撥簾看」とみえる通り、この時の情況からすれば、簾を上げるならば、原詩の立場からすれば、当然「撥」でなくてはならない。蜻蛉の作者が、そこまで考慮に入れたか否かは、無論、不明であるが、少くとも、この程度に「巻きあぐ」が広く用いられていたとみる事が出来よう。

ここまできて、漸く、枕草子の一節が必要になってくる。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらふに、少納言よ、香爐峯の雪いかならんと仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、わらはせ給ふ。人々も、さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人には、さべきなめりといふ。(二九九段)

とあり、この中に、「歌などにさへ歌へど」とあるので、「朗詠百首」(羣書類従卷一七五)から引けば、冬部に、

香爐峯雪撥簾看

こゝながら宿の簾を巻きあげてみるおもしろき山のすゑぶり
などの例がある。

枕草子の中、簾を上げる動作に関する例は、この例をも含め十二例ある。「ひきあげ」(129)「いささかひきあげ」(36)の二例、「うちあげ」(378)の一例、「もたげて」(137)の一例の外は、「いと高うあげ」(302)「たかうあげて」(35, 193)「あげて」(240, 224)等、「上ぐ」が用例の基本である。

清少納言は、この場面では、無論演技として、恭々しい態度で、簾を高々と巻き上げることによって、中宮に奉答したのであろう。動作自体としては、簾を「高く上げ」ることと、高く巻き上げることとは全く同様の筈である。枕草子にみえる「あぐ」という用例を検討しても、すべて、「まさ上ぐ」と些も相違はない。つまり、この両語を区別して用いたとは到底思われぬ。

また、枕草子を除いて、簾を「あぐ」という、他の用例(源氏物語・紫式部日記・浜松中納言物語等)を検討しても、訓点語として、「撥簾看」の個所に対する訓として、原詩の詩情に相応しい使われ方をしている「アグ」に近い例は全く見出されない。つまり、当時、少くとも和文に於ては、「あぐ」と「巻き上ぐ」とは、同義語として使用されていたといえよう。それ故、紫式部は白氏の原詩に対して「巻きあぐ」を用い、清少納言は「高く上ぐ」を用いてはいるが、原詩の理解の程度には、殆んど変りがないといえよう。

従て、若し清少納言が「マキアグ」という訓の施された文集か朗詠集に接して、そう訓んでいて、それが彼女自身に固定していたとすれば(当時愛唱されていたこの句が、聴覚を通して固定することはごく自然である)、紫式部と同じく、『枕草子』に於ても、

当然、「巻きあぐ」と表記したに違いない。とすれば、紫式部と清少納言の（当然、蜻蛉日記の作者も含めて）、「撥簾」に対する訓みは、唯、点本の系統を異にしていたというべきであろう。前述の如く、「アグ」と訓する朗詠点本は、少からず現存する。

近来、訓点の施された漢籍・仏典、謂わゆる訓点本の蒐集、調査、並びにその研究は急速に進展し、正に瞻目すべきものがある。ただ、この仕事に携わる人は多くは国語学者であり、その主たる目的は、訓点を国語史の重要な資料と見做しての蒐集・研究である。

無論、訓点本は、ただこの目的の為に供せられるのではない。訓読の跡を迎えることにより、中国思想や、中国文学のわが国に於ける受容を一層明瞭に跡づけることが出来る。訓点を施すということは、漢籍・仏典の翻訳であり、中国文化受容の最も基礎的資料といえる。訓点資料を翻訳資料であるという立場から、つまり、ある訓が原典の意味に如何に正確に迫ったか、或いは、原意とは遙か遠い訓が施されるようになった原因は何故か、というような、原典と対応させての検討が、訓点資料を使用してもっと活潑に行われることが望ましい。その為には、同時に、原典としての漢籍や仏典の意味が正確に解せられねばならない。⁽³⁾

また、女流文学等の和文には、多くの漢籍・仏典が引用され、或いは、それをふまえた表現がみられる。その出典研究の段階に止まることなく、その引用された箇所、和文に於ける扱われ方を通して、引用原典の理解のされ方も検討されねばならない。

つまり、引用された原典に対する訓を出来得る限り蒐集し、その原文自体の意味や、それをふまえた和文の表現とも比較検討することにより、原詩文の、当時に於ける受容のされ方も、より明かにすることが出来る。

「撥簾」という造語を、白氏は極めて特殊な条件の下に作り出した。従って、中国に於ても一般化はしなかった。この語がわが国に伝えられ、夙に、菅原道真はこれに注目し、その受容に略々成功した。この先例があったればこそ、平安末期迄、この言葉は生き続けることが出来たといえよう。一方、当然のことながら、この「撥」は訓読され、幾種かの訓のうち、当時、最も理解され易い訓が「マキアグ」であったものと思われる。但し、これは原字の意味とも異なり、従って、必ずしも、白氏の詩情を汲み取るものでもない。

然しながら、実は、これが訓読の運命であろう。白氏新楽府の「時勢粧」は、平安時代、博士家の人により、翻訳されて「イマヤウ

スガタ」と訓まれ、以来、江戸時代に至るまで生命を保ち、他の訓は忘れ去られた。実は、この訓も原文字に即したのではない。白氏香鑿室下の詩〔撥簾〕の受容も、原文にとっては功罪相半ばする翻訳としての訓と、その命運を共にする。清少納言の故事の如きは、その一齣に過ぎない。そこには、原作と、その翻訳とを繞る、常に新しい問題が存するのである。(一九七三年十月一日稿)

〔補〕 成稿後、若干の時間的余裕があったので、更に、和漢朗詠集鈔本を調査し(無論、この外、鎌倉時代鈔本をも含め、訓点の施されていないものも少なからず存する)、次に挙げる訓点本を、主題に関する資料として増補する。〔 〕内はその略称である。

- 〔正嘉本〕：桂泰藏氏藏正嘉二年菅原長成点本二軸 〔天理本〕：天理図書館藏南北朝写本一軸 〔天理曆応二年写本一帖〕：延享元年柳原光綱自筆本一冊 〔穗久邇本〕：穗久邇文庫藏延慶二年写本二帖 〔岩瀬延享本〕：〔天理貞和本〕：同藏貞和三年安倍直明点本二軸 〔岩瀬延慶本〕：岩瀬文庫藏延慶二年写本二帖 〔陽明文庫本〕：陽明文庫藏鎌倉中期写本二軸 〔東大覚源本〕：東京大学国語研究室藏伝二条覚源法師筆鎌倉写本一軸 〔東大正本〕：同藏天正三年写本一冊 〔東大残花本〕：同藏戸川浜男氏旧藏〔室町末〕写本一冊 〔日大延徳本〕：日本大学図書館藏延徳三年写本二帖 〔早大弘治本〕：早稲田大学図書館藏弘治三年写本一冊 〔早大永禄本〕：同藏永禄六年写本一冊 〔東教大元亀本〕：東京教育大学図書館藏元亀三年写本二冊 〔蓬左文庫二条本〕：蓬左文庫藏伝二条為重筆室町写本二冊 〔蓬左文庫山崎本〕：同藏伝山崎宗鑑筆室町写本二冊 〔京大本〕：京都大学附属図書館藏〔室町末〕写本一冊 〔京博世尊寺本〕：京都国立博物館藏伝世尊寺行季筆室町写本二冊 〔学習院本〕：学習院大学国語研究室藏〔室町末〕写本一冊 〔学習院三条西本〕：同藏三条西家旧藏〔江戸初〕写本一冊 〔金刀比羅宮本〕：金刀比羅宮藏〔室町末期〕写本一冊 〔東北大本〕：東北大学図書館藏享禄三年写本一帖 〔国会菅家本〕：国立国会図書館藏文化十一年菅原長親校本二冊 〔有栖川宮本〕：高松宮家御所藏旧有栖川宮御本貞享二年写本一冊 〔有栖川宮一本〕：同藏江戶写本一冊(有栖川宮本は二本共マイクロ・フィルムによる) 〔陵一本〕：宮内庁書陵部藏(模近写)一冊

次に、以上の二十七本と、既に本文に挙げた十七本とを合せ、訓の施され方を、その施された位置や、朱墨を区別して、分類、表示

すれば次の通りである。和漢朗詠集の訓点に関する系統上の研究が進めば、この表示は、更に整理されるであろうが、いまは、手を加えずに、総ての用例を列挙する。凡例的事項を挙げれば、

一、これは、右傍、及び、右傍内側の訓により分類する。

一、例えば、「簾」「撥」の、送仮名の「ヲ」と、ヲコト点の翻記としての「を」とは区別せず、総て片仮名で表記した。また、「カ、ケ」とあって、ヲコト点「て」の施されていない場合も、特に区別しなかった。

一、訓のうち、() 内のものは、朱書であることを示す。また、注記を要する箇所には「*」印を施し、後註を附した。

〔カ、ケテ〕

- (1) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 管見抄本・天理本・東急本・尊経閣叔本・山田本・東教大元亀本・陵森谷本・金刀比羅宮本・学習院三条西本・岩瀬延享本・有栖川宮本・陵一本・陵寛永刊本*

- (2) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 蓬左文庫山崎本*

- (3) 撥^{マキアケテ} 簾^レ 天理曆応本・穂久邇本・日大延徳本

- (4) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 正嘉本

- (5) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 東急管本・陵伏見本*

- (6) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 国会管家本

- (7) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 尊経閣二条本

- (8) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 学習院本

〔マキアケテ〕

- (9) 撥^{マキアケテ} 簾^レ 天理貞和本*

- (10) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 京大本

- (11) 撥^{マキアケテ} 簾^レ 東大天正本

〔アケテ〕

- (12) 撥^{アケテ} 簾^レ 早大永禄本・内閣本

- (13) 撥^{アケテ} 簾^レ 東大残花本

- (14) 撥^{カ、ケテ} 簾^レ 早大弘治本

〔マイテ〕

- (15) 撥^{マイテ} 簾^レ 東大寛源本

- (16) 撥^{マイテ} 簾^レ 教順本*

(17) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 有栖川宮一本

(18) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 陵安貞本

〔ツイハテ〕

(19) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 蓬左文庫二条本

(20) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 寛正本

(21) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 静嘉堂本

(22) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 陵別本*

(23) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 岩瀬延慶本

〔ランハテ〕

(24) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 陽明文庫本・陵又本

〔ケテ〕*

(25) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 東北大本・国会本

〔テ〕

(26) 撥^{ツイハテ} 簾^{ツイハテ} 京博世尊寺本

(註) (1)この外、注釈書ではあるが内閣文庫蔵和漢朗詠集抄にも「カ、ケテ」の訓がみえる。(2)京都府立総合資料館蔵和漢朗詠集私注弘治三年写本には、右傍内側「アゲテ」、外側「カ、ゲテ」、左傍「マキアケテ」が施される。私注刊本は多く「アゲテ」

が施されているので、(2)と同じ二訓が、別に施されたのかも知れない。(4)左傍「マキアケテ」には朱合点を施す。(5)岩瀬文庫蔵和漢朗詠集私注刊本には、松永尺五が「菅家深秘之書」から訓を朱書している。刊本の訓「アケテ」(右)の外側に「カ、ケテ」、左傍に「マキアケ」(内)「ツイハツテ」(外)を加う。この菅家の訓は、東急菅本と同じである。(9)「マキアケテ」の合点は朱筆。京都府立総合資料館蔵朗詠私注の別本〔江戸初〕写本には、右傍に「マキアケテ」一訓が施されている。

(11)東大天正本は、初め墨訓「マキアケ」が右傍に施されており、後朱筆にて「マキアケテ」「カ、ケテ」の二訓が加えられた。従って、「マキアケテ」は、墨訓の上に、同じ朱訓が重ねられている。(14)右傍外側の訓「カ、ケテ」及び「ミスヲ」は淡墨筆。異筆であらう。

(16)岩波文庫本所収、黒木安雄氏旧蔵朗詠注抄に「マイテ」あり。京大図書館蔵朗詠寛永五年刊本(近衛本)に、朱筆「マヒテ」が加えられている。(17)「コイテ」は「マイテ」の誤写であらう。(18)「マイテ」。(21)「カ、ケテ」、共に合点を施す。

(22)岩波文庫本所収、飯島花月氏旧蔵長祿年間写本に「ツイハテ」あり。(25)この「ケテ」は、「アケテ」「カ、ケテ」「マキアケテ」の何れとも解し得る。

以上、和漢朗詠集鈔本四十四本に施された六訓を表示したが、更に、各訓の時代別・朱墨別延べ総数を示せば次の通りである。尚、本奥書に年号のある場合は、それに従った。

	(鎌倉・南北朝)		(室町)	(江戸)	(近写刊)
カ、ケテ*	(朱) 211	(墨) 213	4	2	
マキアケテ	(朱) 16	(墨) 4			
アケテ	(朱) 1	(墨) 13			
マイテ**	(朱) 1	(墨) 4	1		
ツイハテ	(朱) 1	(墨) 3	5		
ヲシハテ	(朱) 1	(墨) 2			

*「カ、ケテ」に重複する「カ、ケ」は一ケに数えた。

**「マヒテ」をも含む。

註 (1) 『落窪物語』(卷二)に「少将心地たがひて、例の乗り給ふ車にはあらぬに、朽葉の簾かかけて、男共多くておはしぬ。」の例があるが、これは「懸」と覚しく、校注に、

一本「下簾かけて」に作るとある。

(2) 白氏文集卷三・四神田本(天永四年点)より、該当箇所を若干例示する(語の下は別訓)。

〔卷三〕「眉細長ヒゲノカソヒエタリ」(上陽白髮人)「時トキ勢セ粧シ

ソノカミスカダ」(同)「面オモ縛シリヘテニシハラレテ」(伝戒人)

〔卷四〕「一始扶床オシカ、リ」(母別子)「膏ワケ屑アフラ

スリテ」(時勢粧)「濃シチヤカニ粧コソコマヤカニ」(塩商婦)

これを見れば、原意に即した訓と、意識されたものが常に併行していることが知られる。このうち、「シリヘテニシハラレテ」というような、和文風な、一種の意識が、平安時代博士家のうち、藤原家の訓であるという推

定がなされている。(小林芳規『平安鎌倉漢籍訓読の国語史的研究』)

(3) その意味で次のことに触れる。白氏文集卷四(新楽府)

「紅線毯」に「太原毯ハルノカ、洗シ、羈縷硬キリウコウ。蜀郡梅薄シキョクノウヘ、錦華冷キンカレウ」

(神田本天永四年点)とあり、この「洗」は「不滑」の意である。太原産のカーベットはざらざらして硬いというのである。これは対句的に、蜀郡の梅の「薄」「冷」

に対する。処が、当該箇所は築島裕氏執筆と思われる『新潮国語辞典』を検すると、この「シブイ」を「地味で、よい。さらびやかでなく、よいおもむきだ。」という項の用例に挙げられている。これなどは、原文誤読の例である。無論、「シブイ」には、「不滑」に該当する用例は多く存する。

本文中に掲げた貴重な鈔本の閲覧・調査に関しては、所蔵者各位の御厚情を賜った。こゝに、深甚なる謝意を表す。